

# 心奥探訪

「貪欲に成長を求めた男が取り戻した「自分」」

暦が9月から10月に移りかわろうとしているとある日。

夏の暑さも少し和らぎ、爽やかな風が心地よく感じる。

それはきつと気温だけのせいだけではないだろう。

「お疲れ様です！」

心地いいリズムで響く声と人柄の良さが滲み出た笑顔が出迎える。

彼との付き合いは短く深い。出会ってまだ一年も経っていない。

それなのに深いと感じるのは、彼が日常的に抱いていた迷い、悩み、怒り、

そして喜びを通じて「彼」という人間性に触れていたからだろう。

逆に言えばそういう想いも彼は自身の成長の糧として取り込んできた。

なぜそこまで成長にこだわってきたのか？

どんな想いで歩み続けていたのか？

そこには大樹のように育った真っ直ぐな想いが秘められていた。

幼い頃から活発だった彼はよく言えば元気、悪く言えば落ち着きのない子供だった。もしかすると動くということ自分で表現しようとしていたのかもしれない。けれど当時の学校は、親は、それを許してくれなかった。

「真面目なのが恥ずかしかったんですよ」

真面目な雰囲気、その裏にある同調圧力のようなものや、やらなければいけないことという枠に嵌められることに疑問を感じていたという。

自分を表現すれば注意される、怒られる。

次第に彼は本当の自分を隠すようになった。

「ふざけてたのは本当の自分を見せれなかったからってのがあるんですよね。」

真面目な雰囲気嫌い、常にふざけることで注目を集めてきた。

周りが笑ってくれると自分を受け入れてくれている、それならばふざけよう。

そうして本心を隠したまま、自分を表現できないまま時間が流れた。

そんな彼に転機が訪れたのは高校1年の時。

仲のよかった友人に誘われて仕方なく付き合ったカラオケ。

これまでの彼にとって人前で歌うことは恥ずかしいことであり楽しいものではなかった。テレビの音楽番組にも一切興味が湧かず、カラオケの誘いもずっと断り続けてきたという。仲の良い友人と二人なら1回くらいはカラオケを経験しておこう。その程度だった。しかし……

「本気で歌を歌えるってこういうことなんや、こんなに解放して良いんや！」

これまでの世界が変わった瞬間だった。

自分を表現する喜び、楽しさ、ずっと彼が封じ込めてきたものが、

「歌うこと」によって思い出されていく。

真面目にではなく本気で。

ふざけてではなく本気で。

まるでピエロのように本心を隠して人を笑わせていた彼が白い仮面を外した。

もっと歌いたい、色んな曲を歌ってみたい、もっとうまくになりたい。

それからカラオケに頻繁に通うようになり、

少しずつ自分を出すことへの自信を取り戻していったという。

しかし高校卒業後は歌手を夢見ながらも、一歩が踏み出せず就職。

けれど「歌が上手になりたい」という想いはブレる事なく、

働きながら音楽コミュニティに所属した。

「焦りはありましたね。」

周りがオーディションなど次のステージを目指す中、自分より上手い人に出会うため、ずっと飛び回りライブ出演など実績を重ねた。

その結果、音楽事務所に所属。

順風満帆に思えたが、そう上手くはいかなかった。

休日出勤の増加、毎週の歌唱レッスン、それによるコミュニティメンバーとの疎遠、追い打ちをかけるように訪れる歌唱力の停滞期。

色んなものがのしかかり、やりたかったことは次第に

「やらなきゃいけない」ことへ変わっていった。

何のために音楽をやっているのか？

そんな疑問が彼を包んでいた。

会社を辞め、事務所も辞め、ライバルたちは友人へと変わり、フリーとして活動が始まった。

「それでもただひたすらに歌唱力はずっと追いかけていましたね。」

フリーになってからもオーディションにエントリー、のど自慢に出演したり、プロアーティストと親交を重ねるなどひたすらに歌唱力を追い求めた。

しかしその一年後、突如として彼を悲劇が襲う。

仕事中の事故。

全治一年の大怪我を負ってしまったのだ。

2ヶ月の入院期間で人の優しさに触れ、

長いリハビリ期間はどう生きるかを見つめる時間となった。

「やりたいことは妥協しない」

人に対して、音楽に対しての想いが強くなりオーディションに対しても  
思いつく限りの手段はやり尽くす気持ちで取り組んだ。

ただひたすらにがむしやらに。

1年のブランクがそうさせるのか当時はかなりギラついていたと彼は振り返る。

研究を重ね、トライを重ね、2度目の事務所入り。

その中でボイストレーニングを教えることもスタート、

事務所主催のイベントで歌手として舞台に立っていた。

そしてコロナ期間に入り、今の想いにつながる大きな出来事が起こる。

事務所の廃業と共に譲り受けたイベントの運営。

当初はプロを目指す人たちが集まるプログラムを一般の人向けに変えた。

これまで彼にとって歌うことは戦いであり勝負の場所だった。

歌唱力を求め学んだことも、上手い人に積極的に会いにいったことも

全ては彼の中で満足のいく1番を獲りに行く手段として。

しかしこの時、目の前に拡がったのは全く違う光景だった。

「争いじゃない音楽のパターンもありなんだ」

それはかつて自分自身が味わった本気で歌う楽しさ。

自分を思い切り表現して味わう解放感。

それらを今この瞬間に感じている人たちの表情があった。

当時を振り返りながら彼はこう語る。

「高校の頃から歌手になりたいより、歌が上手になりたいってずっと言っていましたね。」

彼が上手くなりたかった理由。

それは自分の存在証明だったのではないだろうか。

当時の彼にとって世界と繋がる手段が歌手という職業ではなく「歌うこと」だったのかもしれない。

戦い以外の方法を知った彼が作る世界はきつと多くの人が手を取り合い、笑顔の和を作るのだろう。

彼が歌い続けたことで育てた想いは大きな大樹となり、今は小さな芽を見守っている。

存在のための歌はもう必要ない。

なぜなら彼の歌声は今日も自分を出すことへの自信を失った人たちの元に響いているのだから。